

溝の口標本室回顧

松原 秀樹¹⁾



写真1 鉱物標本陳列室, 昭和40年頃。

地質標本館が筑波に開館して10年が経った。その前身となる溝の口標本室の30余年は過去の一つの時代として遠ざかってゆくが、この機会にふり返って見たいと思う。

地質調査所が明治の始めより多年にわたって収集した木挽町時代の貴重な標本は戦災によりその多くを失い、ことに化石・石炭等の標本をほとんど無くしたのはまことに惜まれることであった。残った標本もラベルは混乱し、産地の不詳となっているものも少なくなかった。

溝の口標本室でまず着手したのは、1) 混乱しているこれらの標本を文献資料を参考に特徴、特質等により出来るだけ産地の正確を期し、全標本の分類整理を行った。次いで 2) 各種の標本の収集に努め、特に分類学上欠け或は不足している分野の収集に努め、多くの研究者からもその協力を得た。しかし一度失われたものの再収集は難しく、ことに化石・鉱物では不可能のものが多かった。一方 3) 陳列室としての体裁を整え、次第に内容の充実が行われた。

溝の口の標本に思う

言うまでもなく鉱物・岩石・化石等の標本は地学系自

然史の実物資料として、或は地球を構成する物質の実物資料としての意義をもち、人工では不可能の、かつ量的にも限りがあるものである。自然文化財として或は研究試料として、これらを収集保存し後世に残さねばならないとし、国の地質の唯一の調査研究機関である地質調査所がもつ一つの業務として収集を行った。

昭和後年代に入って国内の鉱山・炭鉱の廃山が相つぎ、これらから産出した標本は今後貴重なものとなってゆくと思われる。

溝の口の標本陳列室に思う

I. 陳列室の内容

溝の口における標本陳列室には

- 1) 鉱物約1,000点→鉱種別
- 2) 岩石約150点→成因別
- 3) 化石約800点→地質時代別・石炭約60点→炭田別・原油数点

の各分類展示と幾つかの説明のパネルを添えた。さらに

- 4) 関東地方の地質・地史説明として

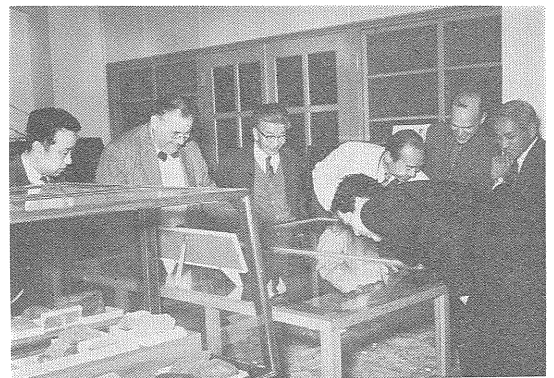


写真2 溝の口標本陳列室にて, 昭和33年頃

中央兼子勝所長(第8代), 右端斉藤正次地質部長(第9代所長), 左端佐藤光之助物理探査部長(第10代所長), 右から3人目は筆者。

1) 元所員: 〒183 東京都府中市宮町2-7-20

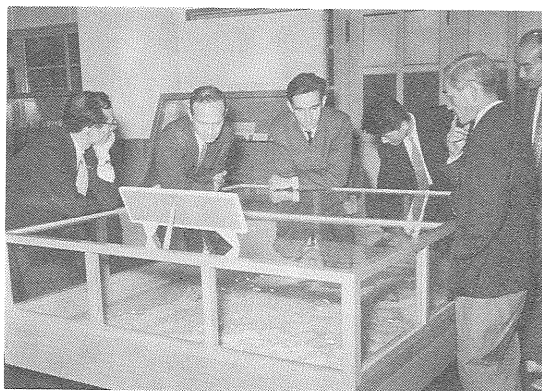


写真3 関東地方地質立体模型, 昭和35年

左から沢田秀徳技官, Mr. J. SEITZ (USGS), Prof. Dr. B. WIRID (Warsaw uni V. Poland), 菊地徹技官, 斉藤正次地質部長 (第8代所長), 筆者。

イ) 20万分の1地質立体模型

ロ) 関東平野の古地理・古気候の変遷のパネル

ハ) 岩石標本及び貝化石・象(歯)化石標本と産出地層柱状図のパネル

ニ) 関東平野深部のボーリングコアとその柱状図の展示

5) 国の地質の説明として

イ) 日本全国50万分の1地質立体模型

ロ) 新生代の我が国の古地理変遷パネルの展示を行った。

II. 陳列室の見学者

見学者は特別の催しのほかは年間おおよそ数百名程度であった。その内訳は

- 1) 外国の地質調査所・大学の専門研究者
- 2) 国会議員・本省及び中央関係省庁の方々
- 3) 一般の方々・大学・高校生
- 4) 中学生・小学生(高学年)一団体として見学

であった。

III. 見学者への説明

標本室では見学されるほとんどすべての方を案内し説明をした。

- 1) 一般の方々には通常、標本・模型・パネルをもとに調査所の業務・国の地質の概略と新生代古地理の変遷・地下資源について、理解して頂けるよう専門語の使用に留意しながら説明を行った。
- 2) 中・小学生への説明は難しくならないよう特に心掛けて行った。

イ) 地元川崎市内の学校が多かったので、まず身近な多摩川の川原の石(礫)・砂・土(泥)について話し、その源は上流の奥多摩地域などの岩石が長年の間に空気・水・気温の作用により砕け壊れて



写真4 象・デスモステルスの化石(歯)標本陳列 昭和43年頃

小さくなったものであること。それらが雨水・川の流れで運ばれて来て一般に下流になるほど粒度は細くなり、最後に東京湾底に泥土などとして堆積してゆく過程を出来るだけ解りやすく説明した。次いで関東平野の生い立ちと多摩丘陵について話し、丘陵の1部から貝の化石が出ること、象(歯)の化石が見つかったことをそれぞれ標本を示しながら、何十万年前のこの地域の環境と、象が我が国にも生息していた事実を説明した。

ロ) 化石標本の説明として、まず地球の歴史を解りやすくするために、その誕生から現在までの時間経過を物差の長さにおきかえて表現して、地質時代を話し、生命のおこり、生物の進化、そして人類の出現から現在に至るまでを、それぞれ尺度の上にあわせて、各時代の化石の標本を説明した。

ハ) 鉱物標本の説明として、地球を構成している物質のもとである元素について話し、金・銀・銅・鉄・アルミニウム・硫黄・酸素など現在知られている元素の数、その元素が単独のこともあるが、多くは2つ以上が一定の法則で結合して鉱物をつくっていることを、黄鉄鉱・黄銅鉱を例として標本を示しながら説明した。

また、各種の金属鉱物・非金属鉱物の標本を示してその利用面を話し、社会生活に不可欠のものとなっていることと、我が国の地下資源の実態を説明した。

ニ) 岩石標本の説明として、地球を卵にたとえて殻に相当する部分を地殻と言い、この部分は岩石で出来ていること。次いで a) 地殻の内部にあるマグマとその活動を話し、この冷却により火成岩が出来、ゆっくり固まれば深成岩(花崗岩など)、急に固まれば火山岩(安山岩・玄武岩など)となるこ

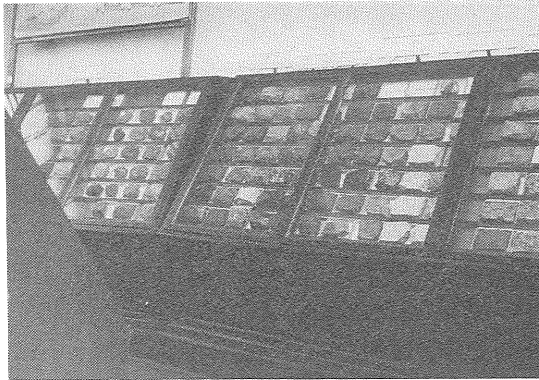


写真 5 岩石標本陳列室の一部。昭和38年頃。

と。b) 礫・砂・泥が川の流れて運ばれ海・湖に堆積し、長い時代を経て再び固結して堆積岩（礫岩・砂岩・頁岩など）となること。珊瑚や貝などの動物の遺骸が集まって出来た生物岩（石灰岩など）や化学反応を起こして出来た化学沈澱岩も堆積岩の仲間であること。c) 地殻の深い所で岩石が強い圧力を受け、或はマグマの熱的作用を受けて変成岩が出来たことをパネルを使い標本を示し出来るだけ解りやすく説明した。

地殻を構成している岩石は長い地質時代を経て変動して、深い所で出来た岩石もときに地表に出て、さらに山を造ることも珍らしくないことと、関東地方西南部に分布する火成岩（深成岩・火山岩）・堆積岩・変成岩について地質模型で説明した。

岩石の薄片の顕微鏡写真をパネルで、岩石をつくっている鉱物とそれらの鉱物が集合している状態を説明した。

ホ) 説明の最後に地質調査所の業務に触れ、我が国土及び周辺海域の地質、地下資源の研究調査及び地熱・地下水など地質の応用面の研究調査を行っていること。また、調査所は火山活動・地震の予知の研究にもかかわっているが、なおこれからの研究の成果が世間では待たれていることを話した。

地球の、あるいはその外周の地殻の研究が進む

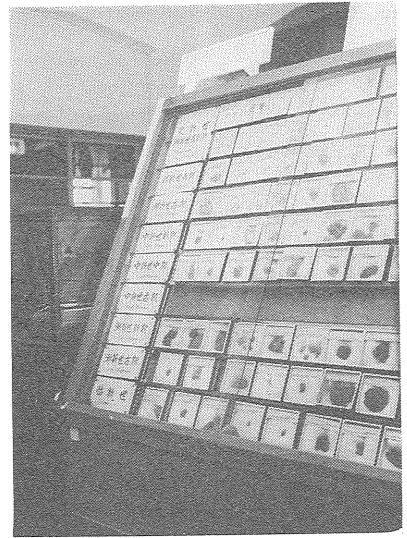


写真 6 新生代貝化石標本陳列の一部。昭和42年頃。

につれ、自然の素晴らしさと同時に怖さに気付いて来ることを話し、自然を甘く見てはならないと結んだ。

へ) 説明に多くの子は熱心に話を聞き、質問をする子や、目を輝かせながら標本を見つめる子もいた。また、鉱物の形（結晶）は人がつくったものと思っていたらしく、それは自然がつくったもの、そして、それぞれの鉱物にはそれぞれに特有の結晶構造があり、この構造は同一種の鉱物ならば世界のどの産地のものも同じとの説明に、自然を不思議に思う子もいた。

後日、見学についてのお礼や感想が寄せられることがよくあった。その寄せ書きの中にこういうのもあった。「ぼく、大きくなったら地球のことを勉強したいと思います」。

MATSUBARA Hideki (1990): A retrospect of the exhibition room, Mizonokuchi.

<受付：1990年5月1日>